

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 11 日現在

機関番号：14501

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24531066

研究課題名(和文) イタリアの異文化間教育の政策と実践 ～中国系移民生徒に焦点を当てて～

研究課題名(英文) Interculture Education in Italy

研究代表者

杉野 竜美 (SUGINO, TATSUMI)

神戸大学・国際協力研究科・研究員

研究者番号：40626470

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：近年はイタリアで生まれる外国人も多く、学校でもそのような外国人生徒が多く存在する。その状況では、移民生徒の言語的差異が表面化しにくい。学校関係者は、移民生徒の出身国が、学業成績に関連しているとは考えていない。しかし、出身国によって保護者は学業志向と労働志向に分かれており、彼らの意向が子弟の学業成果に影響している。また、街中では、国籍による棲み分けが存在している。この状況が学校に持ち込まれている。高校生以上になれば個人の行動は自己責任によるところが大きいが、中学生以下の子どもたちに関しては、保護者の意向に大きく左右されている。移民生徒たちの行動・交友範囲も、保護者の影響を大きく受けているのである。

研究成果の概要(英文)：In recent years immigrants' children born in Italy have increased, then now in Italy, there are many immigrants' students born there. In that situation, their language and cultural problems are hardly revealed. School persons think that their original country is not related to academic performance. However, immigrants' original country is related to their jobs and intentions; academic- or labor-oriented. For instance, children is serious about their studies when thier parents want to them go to the next stage of education.

Then, in some town, segregation by nationality exists. It is not least that this situation and culture are brought to schools. In Italy, high school students assume responsibility for their-self. On the other hand elementary and junior high school students are influenced by their parents. The range of their activities and friends is greatly influence by their parents.

研究分野：教育社会学

キーワード：異文化理解教育 移民子弟 イタリア

1. 研究開始当初の背景

本研究開始当初、代表者である杉野は、移民生徒が急増するイタリアを対象に、移民生徒の学校への適応をはかる指標として、就学率・遅滞率・修了試験の結果を総合的に判断した「教育達成」に着目し、人間関係を教育への資本として捉えた「社会関係資本(Social Capital)」との関係において研究を進めていた。移民生徒を含むマイノリティ生徒の教育達成の先行研究では、特にその要因に関する研究が蓄積されている。それらの研究・分析は、移民側の要因や受入れ社会側の要因などあらゆる角度から行われており、その動向は教育達成要因を特定する調査に始まり、近年では教育達成要因に関わる様々な状況について調査・研究が展開されている。しかし、イタリアにおける移民生徒の教育達成に関する研究は希少であり、唯一ベソツツィ(2002)の調査・研究が代表的と言えた。ベソツツィの研究では、重回帰分析を用いてマクロな視点で分析し、移民生徒の教育達成に影響を与える要因は、様々な要因が絡み合うと結論付けながらも、移民生徒を取り囲む人間関係が重要性であることを浮き彫りにしている。この人間関係を教育の資本として捉えたのが「社会関係資本」であり、代表者・杉野のこれまでの研究では、イタリア社会に向けた社会関係資本を有益に活用できていない移民グループとして、中国系移民生徒の存在に言及してきた。

移民生徒の社会関係資本の一諸相である受入れ社会の見解を得るために、研究代表者は教育関係者(公教育省「移民生徒のための部局」担当者、諸学校長、異文化間教育専門教員、保護者協議会責任者、移民生徒支援NGO スタッフなど)へのインタビュー調査を2008年に実施した。移民生徒の学校への適応に関する事項を中心とした、このインタビュー調査から明らかになったことは、異文化間の対話を重視した異文化間教育の重要性と、それが移民のイタリア語習得に支えられていること、そして、イタリア教育関係者が、中国系移民とその子弟に対して問題意識をもっていることである。つまり、異文化間の対話を重視し、移民のイタリア語運用力に重点を置くイタリア社会の学校関係者は、イタリア語を話さず、独自の文化を閉鎖的に展開する異質な民族として中国系移民(とその子弟)を捉えていたのである。このインタビュー調査では、移民生徒の社会関係を形成する一部である、イタリア側の教育関係者の移民生徒に対する見解を得たが、移民生徒自身の視点を得るには至っていない。

そこで本研究では、学校教育活動における移民生徒の適応の実態を社会関係資本との関連で明らかにする。

2. 研究の目的

移民生徒の学校への適応状況と社会関係資本の実態をもとに、異文化間教育の課題と今後の在り方を浮き彫りにすることを目的とした。活発な人の国際移動に伴って、移民子弟の教育的対応は、あらゆる国家における教育的課題の一つとなっている。本研究は、日本ではほとんど発表されてこなかった、イタリアにおける移民生徒の教育的対応である異文化間教育に関する実践について明らかにする。

3. 研究の方法

研究方法は、文献調査、学校訪問・教室観察、図書館訪問、母語教室訪問・観察である。

主な文献情報は、カリタス(CARITAS)とローマ移民研究センター(CSER)によって収集した(2012年、2013年、2014年)。特にカリタスでは、『移民白書(MIGRAZIONE)』を編集しており、移民子弟の教育関連担当スタッフによるレクチャーからも状況を把握することが出来た。移民全体、移民子弟の就学状況などのデータが網羅されている。基本的な概要を抑えるためには、必須の資料と言えるだろう。ローマ移民研究センターは、設立当初はイタリアから外国への移民を扱っていたが、近年では国内の外国人に関する研究が多く見られる。

学校は、プレシャ県キアリ市のトスカニー二校を訪問した(2014年10月)。校長へのインタビュー、中学2年生社会科の授業に参加し観察を行った。校長へのインタビューでは、学校内における移民子弟の状況だけでなく、街の様子も含めながら、移民子弟の家庭・生活環境について知り得た。

ポローニャ市の多文化共生プログラムを実践している(一部の)図書館を訪問し、利用者へのインタビューを実施した(2014年)。図書館では、乳幼児を対象としたブースがあり、このブースで日本語の絵本を読み聞かせるプログラムを訪問した。このプログラムには、ポローニャ市で暮らす日本人が子ども連れて参加しているほか、スウェーデン人親子など多文化に(親が)触れたい、(子どもに)触れさせたい人達が集まっていた。

ポローニャ市の保護者が開催している母語教室を訪問し、保護者にインタビューし、母語教室を観察した(2014年)。小学生から中学生までが母語学習を行っていた。教員の資格・経験のある保護者を中心として、資格・経験のない保護者たちが勉強会を重ねながら授業を実施していた。高学年になるほど、イタリアの学校の勉強が忙しくなるために母語学習を継続できなくなる場合が多く、学年が高くなるほど学習者は減少していた。

4. 研究成果

移民生徒とはいうものの、近年はイタリアで生まれる外国人も多く、学校においてもそ

のような外国人生徒が多く存在する。

訪問・観察したキアリ市のトスカニー二校も同様で、外国人生徒のうち90%以上がイタリアで生まれた外国籍生徒であった。このような状況では、移民生徒の言語問題や文化的差異が表面化しにくい。トスカニー二校では、イタリア語教育が必要な移民生徒に対して、「100ore」(国家による約€5,000の予算にて、1年間に100時間、特別追加の教授時間を設けることが可能)を利用して国語教員を配置する措置を実施していた。学校関係者は、移民生徒の出身国・地域が、学業成績に関連しているとは考えていない。特にイタリア語の問題は少ないと考えている。しかし、アラブ文化の家庭では、女性(母親)が社会で活動することは少なく、彼女たちのイタリア語力は低い。それゆえに、子どもの学校の問題(勉強を含む)へ介入することが難しく、家庭と学校の間を阻んでいるケースも少なくない。ただ、母親がイタリア語を話さず母語を保持しているということが、子どもの母語も守られるということを考えれば、あながち悪状況とも言えない。

また、保護者たちは出身国・地域によって学業志向と労働志向に分かれており、(移民)保護者の意向が子弟の学業への取り組みや進路に大きく影響している。また、街中では、国籍による棲み分けが存在している。この状況・文化が学校に持ち込まれることも少なくない。ドロップアウトに関しては、義務教育年齢である16歳までは、学校と市(comune)の共同責任によって対処している。しかし、これも住民登録のある者だけが対象であるために、密入国者などの無登録者に関しては対処が不可能だという問題をもつ。その代表として、中国移民子弟を挙げることが出来る。学校関係者は、就学児童として扱われていない未成年らしき中国人を町で確認しているのである。

ボローニャ市中心に位置するサラボルサ図書館は、図書館施設の一部に乳幼児専門の図書コーナーを設置している。このコーナーでは、多言語にわたる乳幼児向けの図書を所蔵しており、乳幼児をもつ保護者(主に母親)の憩いの場としても機能している。図書と空間を提供しているだけでなく、外国語の(ネイティブによる)絵本読み聞かせ会などのプログラムもある。あらゆる市民の憩いと文化交流の場としての機能を有しているのである。

そのほか、教会とのタイアップで保護者が主催している母語教室など、さまざまな団体が協力し合う形で、多文化教育の推進が実施されている。しかし、前述したように、子どもたちの学年が上がるにつれて母語学習の機会は減少する傾向にあり、深い意味での多文化教育の実践が困難な側面も伺えた。

イタリアの子どもたちは、高校生以上になれば個人の行動は自己責任によるところが大きいように見える。その一方で、中学生以

下の子どもたちに関しては、(当然ながら)保護者の意向に大きく左右されている。移民生徒たちの行動・交友範囲も、保護者の影響を大きく受けているのである

移民生徒の帰属意識の形成について、学校教育の範疇ではシチズンシップ教育を挙げることが出来る。イタリアで生活する市民としてのシチズンシップと、(移民生徒本人の、またはその保護者の)出身国・地域への帰属意識とのバランスを知ることで、移民生徒の社会関係資本の在り方を見ることが出来るだろう。次なる科研の課題「多文化共生社会に向けた学校教育におけるコンピテンシー」(平成27~29年)において、この研究を深化させたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 7件)

杉野竜美、大学生の留学支援におけるラーニング・ポートフォリオ活用の可能性、大学教育研究、査読有、第23号、2015、89-102
近田政博、杉野竜美、アクティブラーニング型授業に対する大学生の認識 - 神戸大学での調査結果から -、大学教育研究、査読有、第23号、2015、1-17

杉野竜美、移民生徒をめぐる学校教育の課題 教育関係者へのインタビュー調査から、日伊文化研究、査読無、第52号、2014年、26-35

野津隆志、乾美紀、杉野竜美、外国にルーツを持つ家庭における母語使用の実態と課題 - 保護者に対する調査より -、国際教育評論、査読有、第11号、2014、34-52

杉野竜美、武寛子、正楽藍、大学生のキャリア展望をもとにした海外留学支援制度の在り方 日本の四年制大学におけるインタビュー調査より、国際協力論集、査読有、第21巻第2&3号、2013、123-142
正楽藍、杉野竜美、武寛子、大学生の海外留学に対する意識の形成要因 日本の四年制大学における比較分析、香川大学インターナショナルオフィスジャーナル、査読有、第4号、2013、19-45

杉野竜美、イタリアにおける移民生徒の社会的統合 ドキュメント調査:教育達成を指標として、アジア教育研究報告、査読有、第11号、2012、58-73

[学会発表](計 2件)

杉野竜美、武寛子、正楽藍、大学生のキャリア展望をもとにした海外留学支援制度の在り方 -日本の四年制大学におけるインタビュー調査より-、日本比較教育学会第50回大会、2014年7月13日、名古屋

大学（愛知県）
武寛子、正楽藍、杉野竜美、大学生の海外
留学に対する意識の形成要因 -日本の四
年制大学における比較分析-、日本比較教
育学会第49回大会、2013年7月7日、上
智大学（東京都）

〔図書〕（計 0 件）

〔産業財産権〕
出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

杉野 竜美 (SUGINO, Tatsumi)
神戸大学・大学院国際協力研究科・研究員
研究者番号：40626470

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：